Social System Research Institute

News Letter

中央学院大学社会システム研究所

2024.1.30

第25号

〒270-1196 千葉県我孫子市久寺家 451
Tel: 04-7183-6529／ Fax: 04-7183-6506
URL: https://www.cgu.ac.jp/socialsystem/

CONTENTS

- 領土と国境への新しいアプローチ …… 2
- JIBSN セミナー 2023 に参加して …… 4
- 国後島の大きさを実感する“ボーダー”ツアー …… 5
- 新局面を迎えた JIBSN・標津セミナー参加記 …… 8
- 標津町そして知床を巡るボーダーツーリズム …… 10
- 「インクルーシブ教育」と多文化共生 …… 13
- 地域の歴史を見つめ直す街～リトアニア共和国カウナスからの報告 …… 14
- 日本の焼酎はなぜ海外で売れないのか？（前編） …… 16
- 埼玉県の「再生：黒目川」を訪ねて …… 18
- 古利根沼を訪ねて …… 20
- 海外からの地方再生・地元支援の取組み …… 22
- 子育て支援は少子化対策ではない …… 24
- 日本の焼酎はなぜ海外で売れないのか？（後編） …… 25
- 日本で技能実習生として働く選択をしたモンゴルの若者たち …… 26
- ボーダーを越えて …… 28
- 北海道東川町を訪問して …… 31

領土と国境への新しいアプローチ

―プロジェクト研究「危機の中の境界地域―稚内・根室・八重山列島を事例として」がスタート―

中央学院大学 副学長・法学部教授　川久保 文紀

2023年4月より、社会システム研究所プロジェクト研究「危機の中にある境界地域―稚内・根室・八重山列島を事例として」がスタートした。旧地方自治研究センターをルーツのひとつにもつ社会システム研究所は、日本の地域社会が抱える様々な課題に対して取り組んできた実績をもつ。本プロジェクト研究のスタートによって、社会システム研究所が日本全国の境界地域の自治体と連携を深めることが可能になると考えている。本プロジェクト研究では、研究者ばかりではなく、境界地域の自治体の実務家、ジャーナリスト、国境写真家、民間交流に関わる個人事業者など、総勢9名で、国家間関係や地域情勢の悪化の影響をうける境界地域の実状と課題について比較と相関の視点から迫っていきたい。

≪本プロジェクト研究の目的≫

本プロジェクト研究の目的は、ロシア・ウクライナ戦争による日ロ関係の悪化や東シナ海における地域情勢の不安定化という、いわゆる危機の状況下において、日本の境界地域を取り巻く現状と課題を比較分析し、今後の展望と活路を見出すことである。その概要としては、まず、ロシアとの間で北方領土問題を抱える根室や、かつては日本の領土であったサハリンと海域を隔てて接する稚内がウクライナ危機によってどのような状況に陥っているのかについて考察する。次に、東シナ海における中国の活動拡大や台湾海峡をめぐる地域情勢の緊迫化によって、八重山列島に位置する石垣、竹富、与那国などの境界地域が日本の国家防衛の最前線となっているが、こうした状況が境界地域に住む人々の生活に対してどのような影響を及ぼしているのかを検証する。そのうえで、各境界地域の現状を比較分析し、生活圏としての境界地域が抱える固有の地域的課題を析出し、領土ナショナリズムを乗り越える方法論的視座を見出していく。

これまでの日本における領土問題へのアプローチは、国家間の対立と競合をめぐるパワーポリティクス、領土紛争の歴史的起源、メディアや表象におけるシンボル操作などのマクロなレベルでの分析がほとんどであり、個別の境界地域に関する並列的かつ叙述的分析が多かった。本プロジェクト研究では、比較と相関のアプローチを採用することによって、立体的に境界地域の抱える固有の地域的課題を捉えるようにする。また、本プロジェクトにある「危機」という用語は、現代の日本を取り巻く地域情勢や安全保障環境をクローズアップさせるために使用しているが、国家以外のアクターや多次元のスケールを軸とする視点から、日本の境界地域にとっての「安全保障（セキュリティ）」とは何かという根本的な問いに対しても取り組んでいく。

≪本プロジェクト研究により期待される成果≫

本プロジェクト研究により期待される成果は、第一に、国家中心的アプローチあるいは国家中心史観に陥りがちであった日本の領土問題に対して、ローカルかつミクロな視座から迫り、日本の境界地域の現状と展望を明らかにすることである。このことは、境界地域の自治体間の相互連携を深化・拡大させることにつながっていく。第二に、第一とも関連するが、境界地域のネットワークが構築されることによって、境界地域の平和と安定につながり、国家間の領土問題に対して政策的影響力を与えうるアクターとして、境界地域を位置づけられるようになる。第三に、日本の境界地域が、「行き止まり」や「最果て」という地理的限界を示す受動的な存在ではなく、外部世界へ開かれた「ゲートウェイ」として潜在的な可能性を有する地域であることを示す。稚内や根室はロシアとの長い地域交流の歴史をもっており、竹富や与那国を始めとした八重山列島は、中国や台湾との密接な関係を有してきたのであり、国家レベルを超えたリージョナルなつながりを再考・発展させる契機となる。本プロジェクト研究によって、日本の境界地域の平和と安定が、人間の生活圏としての境界地域の発展によって維持されるという見方が提示され、研究領域としてのボーダースタディーズ（境界研究）の実践的な貢献が期待される。

≪本プロジェクト研究における地域連携・社会貢献≫

本プロジェクト研究のスタートと同時に、中央学院大学社会システム研究所は、「境界地域研究ネットワークJAPAN（JIBSN）」（代表幹事：工藤広稚内市長）へ加盟申請を行い、21番目の団体として承認された。JIBSNは、日本初の境界・国境問題に関する政策提言組織としての位置づけをもち、日本の境界地域をつなぐネットワークとして2011年に発足した。境界地域の自治体や大学などの研究機関が加盟し、定期的に研究交流を行っている。今後、小規模ながらも首都圏に位置する本学から、日本の境界地域の現状と展望について積極的に発信していく意義は大きいと考えている。本ニューズレターでは、2023年10月に開催されたJIBSN標津セミナー「境界地域の移住と観光を考える」（北海道標津町）の参加報告を兼ねた4本のエッセイをお届けしたい。

日本の最北端の地（北海道稚内市、2022年7月）

日本最南端の有人島・波照間島（沖縄県竹富町、2022年10月）

JIBSN セミナー2023に参加して

中央学院大学 法学部准教授　土屋 耕平

今回初めて、境界地域研究ネットワークJAPAN（JIBSN）セミナーに参加した。JIBSN セミナー 2023 は北海道標津町で、「境界地域の移住と観光を考える」をテーマとして 2023 年 10 月 21 ～ 22 日にかけて開催された。JIBSN は、Japan International Border Studies Network の略称である。規約によれば、JIBSN の目的は、我が国及び外国の国境又はそれに準じる隣接領域（以下「境界地域」という。）に関する調査及び研究を行い、その専門的知見の共有を通じて、境界地域の抱えるさまざまな課題に適切に対処し、その発展に寄与することとされる。そして、学際的な領域にまたがる境界研究と地域に根付く実務を連携する新たな社会的貢献を図るという。

境界地域研究ネットワーク JAPAN は、大学などの研究機関だけでなく、自治体が構成員となっているのが特徴である。加盟しているのは、稚内市、対馬市、根室市、小笠原村、五島市、竹富町、与那国町、隠岐の島町、標津町、礼文町の 10 市町村である（受付順）。

JIBSN セミナー 2023 の移住をテーマにしたセッションでは、人口流出数よりも流入数の方が多い社会増が近年定着しているという五島市の報告が印象に残った。雇用者を増やすなどの施策だけでなく、五島日本語学校の開校のように「五島市の理解者を増やす」施策も進めているという。五島日本語学校は、長崎県公立大学法人や五島市などの公私の協力によって構築された学校とされる。ただし、五島市の将来人口推計では、出生率が上がったとしても今後も人口減少が続く見通しである。人口減少の克服を目的としていた、国の地方創生政策に対しては、日本全体が人口減少するなかで各自治体に勝ち目のない試合を強いているとの批判もあった。2014 年 11 月にまち・ひと・しごと創生法が成立してから来年で 10 年が経つ。今回のプロジェクト研究は地方創生のあり方を問いなおす機会にもなる。

観光をテーマにしたセッションでは、稚内市の報告においてサハリン州との過去の交流実績などとともに、サハリンと連携したボーダーツーリズムが休止となっていることなどの説明があった。ボーダーツーリズムとは、国境観光や境界地域の観光などを指す。ボーダーツーリズムを特に観光産業として見る場合、国際情勢に左右されやすい地域とそうでない地域とでボーダーツーリズムの評価も変わりそうである。

また、今回のセミナーでは、北方領土の元島民の方の講話を標津町と羅臼町のそれぞれで聞く機会があった。元島民などで構成する千島歯舞諸島居住者連盟（「千島連盟」）では、北方領土の返還を求める署名運動などに加え、戦前の島での暮らしぶり、ソ連軍の侵攻や住民の退避状況などを広く語り継いでいくため、「北方領土の語り部」を育成し派遣する事業なども行っている。現在は実施されていないが、ビザなし交流なども進められてきた。

このように、境界地域と一括りにしてみても、そこにも多様性があることを認識させられる。各自治体の歴史や文化なども踏まえながら今回のプロジェクト研究を進めていきたい。

JIBSN セミナー 2023、於：標津町文化ホール

国後島の大きさを実感する“ボーダー”ツアー

毎日新聞報道部根室　本間 浩昭

北方領土・国後島（くなしりとう）の島影を眺めながら北海道本土最東端の海岸線を北上する国境地域研究センター（JIBSN）主催の「国境を越えないボーダーツアー」が 10 月行われた。

「見えない壁（invisible wall）」とも呼ばれるロシアが主張する根室海峡の中間線。それは、かつて西ドイツと東ドイツを隔てていた「ベルリンの壁」や朝鮮半島を南北に 2 分する「38 度線」のような、目に見える壁（visible wall）ではないが、ひとたび越えようとすれば、銃撃されかねないという点では何ら変わりがない。

新型コロナ禍に続くロシアによるウクライナ侵攻でビザなし交流などの「四島交流事業」が止まり、根室海峡には冷戦期さながらの「見えない壁」が立ちはだかる。そうした厳しい世界情勢の中、30 人余りを載せた大型バスは標津町をスタートした。根室海峡をはさんで約 20km 先にある対岸の国後島・泊山（標高 535m）の島影が、澄み切った青空の下、いつにも増してくっきり、大きく見えた。78 年前の旧ソ連軍の侵攻で奪われ、いまもロシアに実効支配されている島だ。

前日に標津サーモン科学館の展望室（高さ 30m）を訪れ、「大きな島だねぇ」とつぶやいていた参加者もいたが、バスが海岸線を北上するにつれ、島影はどんどん大きくなり、奥へ奥へと連なっていった。泊山の西側には羅臼山（標高 882m）もそびえ、北方領土最高峰の爺爺岳（ちゃちゃだけ）（標高 1,772m）のすそ野も雲の下に見えた。東西 122km もある長大な島であることが実感として分かる。面積をみても、沖縄本島より大きく（約 1,490 ㎢）、北隣の択捉島（えとろふとう）（約 3,139 ㎢）に次ぐ日本で 2 番目に大きい「巨大な島」なのだ。

写真 1　標津サーモン科学館の展望室から見た北方領土・国後島の島影

足かけ 35 年近く毎日新聞報道部根室で北方領土を定点観測して来た私でさえ、今回ほど国後島の巨大さを実感したことはなかった。それは、濃霧に覆われがちな初夏から夏とは対照的に、天高くスカイブルーの空が果てしなく広がる秋の旅なればこそのプレゼントのように思えた。刮目（かつもく）すべきは、かつて“ボーダー”を意識することなく、自由に行き来していた時代の「物証」や、国境が脅かされていた時代のダークな歴史が、旅の途中に立ち寄った遺跡や史跡、博物館相当施設に色濃く残され、

写真 2　羅臼国後展望台から北方領土・国後島を眺めるツアー参加者

「国境を越えないボーダーツアー」ならではの醍醐味を味わえたことだ。

羅臼町郷土資料館は、廃校になった小学校を活用して 2011 年に開館した博物館相当施設である。ここでは学芸員の天方博章（あまかたひろあき）さんが、「オホーツク文化」について解説してくれた。主にオホーツク海沿岸に遺跡が点在し、かつては「謎の海洋民族」とも呼ばれ、海獣狩猟と漁労を生業とした民族だ。彼らは 5 世紀ごろ樺太（現在のサハリン）から北海道に南下、海岸線沿いと離れ小島に暮らしの拠点を定め、やがて千島列島まで生活圏を広げて行った。近年の発掘調査によって、次第に「謎」が解明されつつある。

「羅臼と根室、国後島にはこの時代の遺跡がたくさんありますが、同じ根室海峡に面した標津、別海にはこの時代の遺跡は 1 カ所しかありません」。やや間があって天方さんは、「彼らは羅臼から対岸の国後島に渡り、その後に根室に至ったと推定されます」と付け加えた。舟を自在に操り、根室海峡をあたかも湖であるかのような感覚で行き来していた時代の人々の移動に参加者は思いをめぐらせた。

写真 3　土器に刻まれた文化の変容の過程について説明する天方博章学芸員（中央）

そのころの北海道では、本州の古墳時代～平安時代に使われた土師器の影響を受けた「擦文文化」と呼ばれる独自の文化が栄えていた。天方さんは参加者に、「二つの異なる民族が接触すると、どのようなことが起きると思いますか」と疑問を投げかけた。

「この質問を子供たちに投げかけると、たいてい『戦った』という答えが返ってきます。でも、実際には大きな戦いは起きなかったようで、オホーツク文化は次第に擦文文化へと融合されていきます」と天方さん。融合していく過程が、文様や器の形などに残されていることについて、土器を手に取って説明した。

土器づくりは主に女性の仕事と考えられており、オホーツク人の女性が自身の出自である土器づくりの伝統的手法を擦文土器に取り入れたとみられる過程が、時代の変遷によって分かるというのだ。彼女らが作った土器には、オホーツク文化の特徴である粘土を波状に貼り付けた「ソーメン文」という装飾が施され、やがてオホーツク土器の特徴とされている口縁部のくびれは消失していく。移行していく過程の土器は「トビニタイ土器」と呼ばれ、羅臼町のトビニタイ遺跡から出土した土器で、知床半島の付近が、移行の舞台であったことを物語る。土器の移行は、二つの民族の融合をも意味する。オホーツク文化と擦文文化の融合の舞台でもあったとも読み取れる。

融合には、逆のベクトルも働いた。それは、吸収された側のオホーツク文化の精神世界「クマ送り儀礼」が、擦文文化に伝えられたことからうかがえる。後のアイヌ文化にも引き継がれたイオマンテ（飼育ヒグマの霊送り）だ。これは、オホーツク文化が一方的に擦文文化に融合されたのではないことを如実に物語っている。二つの民族が接触することによって、当然のことながら「良いものは取り入れる」という取捨選択が働いていたことを示しているに違いない。

今回のコースからは少し外れるが、同じオホーツク海に面した枝幸町のオホーツク文化の遺跡「目梨泊遺跡」で 1987 年に発掘された人骨は、一般的なオホーツク人とは異なる特徴を示していた。顔と上あごが大きく、頬骨が横に張り出し、鼻が低く、後のアイヌ民族に近い北方モンゴロイド系と推定された。そのような特徴の男性が、オホーツク文化の遺跡に葬られているという事実もまた、融合を示す証左であろう。

斜里町の知床博物館では、江戸後期の帝政ロシアの南下を背景に、幕命で 1807（文化 4）年、蝦夷地警備のため斜里に派兵され、厳寒のため命を落とした津軽藩士 72 人の殉難関係資料なども見た。

前日には国後・択捉を結ぶ海底電信基地として 97（明治 30）年に建てられ、「ポー川史跡自然公園」に移設復元されたレンガ製の建物も見学した。流氷や潮流による断線が多かったため、施設は 3 年後に根室に移され、「根室・国後間海底電信線陸揚施設」は 2021 年、国の登録有形文化財になった。

写真 4　ポー川史跡公園に移設復元された「標津―国後島海底電信基地」（右）で記念撮影をするツアー参加者ら

知床横断道では、知床峠の頂上付近で道路を横断する親子のヒグマにも遭遇した。バスの前方から右側の茂みに入って行った。ヒグマは、対岸の国後島や択捉島にも生息しており、陸橋でつながっていた氷河期に移動したものとみられている。根室海峡からはマンモスゾウの臼歯がこれまで計 5 点、漁網にかかって見つかっている。

写真 5　知床峠で遭遇したヒグマの母子を観光バスから撮影する参加者（中央）。

追しておくが、2021 年 8 月、国後島に住んでいたロシア人が約 20km を泳いで渡った先は、今回のツアーの起点で JIBSN 標津セミナーが行われた標津町の海岸だった。このロシア人は、北海道警察の標津派出所の前で町民に声を掛けられ、「クナシリから泳いで来た」と亡命希望をほのめかした。「日本へのあこがれがあり、ビザなし交流で日本に来ることを楽しみにしていたが、新型コロナウイルスの感染拡大で交流が中止となって渡れなくなった」ことが動機の一つとされている。彼は入管施設に収容された後、難民認定を申請し、当面は仮放免の身分だという。

ロシアによるウクライナ侵攻が始まったのは、その半年後の 2022 年 2 月のことである。“ボーダー”を越えた命がけの海峡横断。いま思えば、絶妙なタイミングで島を抜け出したことになるが、「日本固有の領土」である国後島に暮らしていたロシア人だけに、立場は微妙だ。当然のことながら“ロシア系日本人”が難民認定されるハードルは高く、「仮放免」の身では、仕事に就くことすらできない。「ロシアに戻る気はない」というが、たとえ戻ったとしても、国境侵犯（密出国）容疑で刑務所に放り込まれるぐらいでは済まないに違いない。ウクライナ戦争は泥沼の様相を深める。これから先、彼にどのような運命が待っているのだろうか。

新局面を迎えたJIBSN・標津セミナー参加記

中京大学 法学部教授　古川 浩司

2023年10月21日、境界地域研究ネットワークJAPAN（Japan International Border Studies Network：以下「JIBSN」）・標津セミナーが北海道標津町文化ホールにて開催された。そこで今回はその参加記を寄稿したい。

JIBSNは、日本の境界地域の自治体、境界地域を研究する大学および民間シンクタンクなどの研究機関やNPOをメンバーとするネットワーク組織である。2011年11月に設立されて以来、2012年度より毎年1度、メンバーである自治体の関連施設でセミナーを開催しており、今回が12回目となる[1]。なお、筆者も参加しているプロジェクト研究「危機の中にある境界地域：稚内・根室・八重山列島を事例として」の主催者である中央学院大学社会システム研究所も2023年4月より構成メンバーである。

今回のセミナーのタイトルは「境界地域の移住と観光を考える」で、「移住」と「観光」を中心に境界地域の自治体職員による事例報告が行われた。各セッションの様子はYouTubeで公開されているので、詳細はそちらをご覧いただきたい[2]。なお、筆者が注目した点は以下の通りである。

まずセッションⅠでは、「移住」に関する施策に関して、五島市、対馬市、標津町、礼文町、小笠原村の自治体職員による事例報告が行われた。有人国境離島法、SDGｓ、漁業就業、高校留学、あるいは、町独自の取り組みを進めてきた自治体を含め、具体的施策は様々であったが、共通の問題点と思しき課題も存在した。――それは「住宅不足」である。すなわち、移住希望者はいても住宅がないことがネックになっているということである。とは言え、これらの自治体は過疎地域の自治体がほとんどであるから「空き家」があるではないかと思われる読者もいるかもしれない。しかし、報告によれば、「空き家」の老朽化が進んでいる結果、お金をかけないと行けなくなることから紹介できない空き家が多いという。これに対して「移住促進住宅を自治体が負担して建設すべき」というのは言うのは簡単であるが、人口減少時代の自治体の財政を考えると、現状では困難であろう。なお、近年、移住者と現地住民のトラブルを報道で見聞きする機会が多くなったため[3]、筆者はその旨を質問した。これに対して、報告した自治体職員によれば、トラブルはなく、移住者同士のネットワーク、移住コーディネーター（相談員）制度の活用などにより対応しているし、そもそも移住希望者には現実的な視点から親身に相談に応じているとのことである。

次に、セッションⅡでは、「観光」に関する施策に関して、根室市、稚内市、与那国町、竹富町、小笠原村の自治体職員による事例報告が行われた。このテーマも、ロシア・ウクライナ戦争に伴う日露関係の悪化により、ロシアとの交流の目途が立たない根室市と稚内市、観光客が戻ってきたとは言え、宿泊場所が不足している与那国町と竹富町、責任ある観光（「またねっ！と言いたいから」）をスローガンに“Ogasawara Smile Tourism”を目指す小笠原村と、こちらも様々であったが、竹富町がオーバーツーリズム対策を進めているのに対し、小笠原村は「南島の100人規制撤廃」のように必要に応じて規制緩和をしていることは非常に興味深かった。竹富町も小笠原村も世界自然遺産のある自治体であるため、互いに参考になることもあったのではないかと思われる。

ところで今回のJIBSN標津セミナーでは、セミナーの前後にエクスカーションがあった。このエクスカーションはボーダーツーリズムと呼ばれているが、その詳細は国境写真家の斉藤マサヨシさんが素晴らしい画像とともにエッセイを公開されているので、そちらをご覧いただきたい[4]。21日の午前中には千島歯舞諸島居住者連盟（元島民・語り部）の福沢英雄氏、22日の午前中には千島歯舞諸島居住者連盟（前理事長・元島民）の脇紀美夫氏より、北方領土問題に関する講話を受けた。福沢氏からはロシア・ウクライナ戦争によるビザなし交流停止に伴う交流中断に対する無念さが、脇氏からは「安倍首相は熱心であったが……」という言葉に、北方領土問題は安倍政権でも解決しなかったばかりか、その後は完全に停滞していることに対する憤りが伺えた。それらの無念さや憤りは、講話終了後に向かった羅臼国後展望台から好天によりはっきりと眺望できた国後島とは非常に対照的であった……。

最後に、JIBSN標津セミナーに話を戻すと、参加する前は「移住」と「観光」のつながりに関して、どのように結びつくのかという考えもあったが、「移住」にしても「観光」にしても、場所の確保が問題になっているようである。聞けば、今回のJIBSN標津セミナーに伴う宿泊の確保も、予定人数よりも多かったためにかなり苦労したそうだ。来年（2024年）10月には与那国町でJIBSNセミナーが開催される予定であるが、宿泊の確保も含めて、来年度のセミナーも有意義に開催されることを期待しつつ、本論を締め括りたい[5]。

羅臼国後展望塔より国後島を臨む筆者

1　2011年から2021年までのJIBSNの活動に関しては、拙稿「日本の境界地域研究と実務の協働―JIBSNの10年間を振り返る―」（『境界研究』No.12、2022年：https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/bitstream/2115/85036/1/04.pdf）を参照されたい。

2　「「境界地域の移住と観光を考える」（JIBSNセミナー2023）（2023.10.21開催）」（East Eurasian Studies SRC Hokudai：https://www.youtube.com/watch?v=VjEkLEb-tdU）

3　例えば、「都市と地方のすれ違い　“地域おこし炎上”はなぜ？」（NHK『クローズアップ現代』2023年9月5日放送）

4　斉藤マサヨシ「標津町そして知床を巡るボーダーツーリズム」（NPO法人国境地域研究センター：http://borderlands.or.jp/essay/Border_tourism_on_Shibetu_and_Shiretoko.pdf）

5　JIBSN標津セミナーおよびこれに伴うボーダーツーリズムに参加した後に、千歳市の陸上自衛隊東千歳駐屯地内にある第7師団史料館（戦車博物館）に立ち寄る機会があった。史料館では、東千歳駐屯地の沿革、日本を含む主要国における戦車の模型、日本における戦車および主な戦車戦の歴史などが展示され、中でも占守島の戦いは日本三大戦車戦の一つとして詳しく取り上げられている。事前に電話予約が必要であるが、日本のボーダーを知る上でも、非常に貴重な展示と現役の陸上自衛官の館長（語り部）による情熱的な説明もあるため、もし機会があれば見学されることをお薦めしたい（「史料館、戦車博物館」（陸上自衛隊第7師団　https://www.mod.go.jp/gsdf/nae/7d/siryoukan.html）。

標津町そして知床を巡るボーダーツーリズム

国境写真家　斉藤 マサヨシ

「鮭（サケ）の聖地」と染められた旗が国道沿いに立ち並び、オホーツク海からの浜風になびいている。北海道の知床半島のつけ根にある標津町に来ている。標津町はじめ羅臼町、別海町、根室市などにまたがる根室海峡は鮭（サケ）の聖地として日本遺産に認定されている。この地は遥か１万年以上の昔からサケは人々と共にあって、今も続いている。大海原と母川を往来するサケは時代を超えて人々の暮らしを支えて来た。縄文人も現代人も、この大自然の恵みである鮭が暮らしの糧となっている。サケの恩恵は地元民だけではない。いつかのテレビ番組で標津町のサケ漁業に季節労働する若者を取り上げていた。7月から10月までの最盛期には全国から集まってくる。短期間で高収入を得た若者は、世界旅行やバイクで日本列島ツーリングなど思い思いの夢を実現させていた。そんな夢をかなえるのもサケである。

端っこの町が活気づくと日本列島全体に波及していく。今年のJIBSN（境界地域研究ネットワークJAPAN）2023セミナーは10月21日から22日の2日間、標津町で開催された。セミナーに先立ち関係者40人ほどが標津町内を視察。私たちを乗せたバスが最初についたのは港の傍にある北方領土館。

北方領土館の１階は北方四島の戦前の様子や四島交流の写真パネルが展示されている。２階は展望台になっていて「国後島まで24km」と書かれた看板の横に大型の望遠鏡が２台置かれている。この日は快晴で国後島の南端ケラムイ岬やノツエト崎をはっきり見ることができた。この展望台から見る国後は「島」でなく北海道と地続きの「半島」ではないか思えてきた。

標津町北方領土館の展望台

セミナー初日、北方領土のカリスマ語り部福澤英雄さんの講話を聞く機会に恵まれた。福澤英雄さんは５歳の時に歯舞群島の多楽島を漁船で命がけの脱出を経験した。福澤さんの祖父は富山県の黒部出身で北前船の乗組員として北海道に来た。昆布が豊富な歯舞群島の多楽島に定住、以来福澤家は多楽島で昆布漁師として暮らして来た。

そんな平和な暮らしが1945年８月の終戦後に破られることになった。銃を構えたソ連兵が土足で家に上がってきて、家の中を物色して仏壇の御りん等を持ち去った。福澤さんは恐怖で身動きできなかったと語る。その後、北海道標津町に引き揚げた福澤さんは一家の大黒柱として必死に働く毎日であった。そんな折、役場の担当者から電話があって北方四島との交流事業をすることになったので、ロシア人を受け入れてくれないかとのことであった。はじめは悩んだが、北方領土の問題を解決するためには、お互いが理解し合わなければだめだとの思いから受け入れる決断をした。

実際に北方四島に居住するロシア人を家族の一員として受け入れ、食事をしたり、着物を着せ、書道を教えたりした。北方四島に住むロシア人はどんな考えなのかと思い、好きな言葉を毛筆で書かせたら「自由」「平和」などと書いた。私たちと同じ考えなのだと思った。それからはロシア人を積極的に受け入れ、墓参団に何度も参加した。

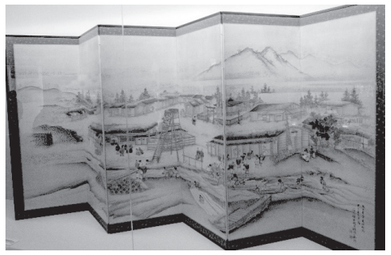
北方領土のカリスマ
語り部福澤英雄さん

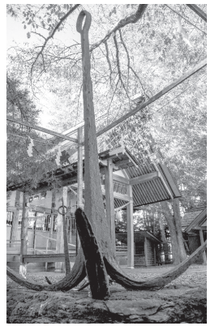
しかし、ロシアのウクライナ侵攻は長年積み上げてきた交流を断ち切ってしまった。今は親しくしていたロシア人との交流も途絶えてしまった。そして福澤さんは語る。戦争はいつか終わる。その時は北方領土の返還を求めるための交流事業も再開しなければならない。

福澤英雄さんの話を聞いた後、私たちは標津サーモン科学館を訪ねた。日本遺産「鮭（サケ）の聖地」の拠点となる施設だ。地上30mの展望台のあるモダンな施設の前には北方領土返還を啓発するモニュメントがある。説明版には対話と交流を意味するとあった。ロシア語の説明もある。施設の１階はサケを中心とした水族館で２階は鮭の聖地エキシビションルームになっている。

エキシビションルームには江戸時代末期の標津を描いた標津番屋屏風（複製）が展示されている。そこには人々が大量のサケを塩蔵するに大忙しの町の様子が描かれている。屏風の中には士部津神社（標津神社）があって、社殿の横には大きな錨が描かれている。この錨は今も標津神社のシンボルとして祀られている。

標津サーモン科学館前のモニュメント


標津番屋屏風


屏風に描かれた
標津神社の四爪錨

私たちは展望台に上った。展望台からは国後島をくっきりと望むことができた。

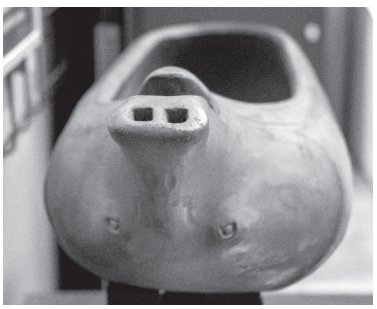
国後島から少し左側に離れた地平線には虹がかかっている。快晴の空に虹があるのは珍しい。北方領土への虹の架け橋ではと思った。サーモンステーキの昼食をいただいてから午後のセミナー会場へと向かった。

標津サーモン科学館展望台から見えた国後島と虹の架け橋

午後からは標津町文化ホールでJIBSN2023セミナーが行われた。テーマは「境界地域の移住と観光を考える」で地元の標津町はじめ、稚内市、根室市、五島市、対馬市、与那国町、竹富町、オンラインで礼文町、小笠原村、多良間村が参加して活発な意見交換が行われた。夜は地元の料理を味わって懇親を深め、この日の日程を終えた。

10月22日、この日も快晴。私たちを乗せたバスは知床へと向かった。

最初に訪ねたのは羅臼町郷土資料館。ここには他では見ることが出来ないオホーツク文化の貴重な資料がある。それは松法川北岸から出土した木製の品々で国の重要文化財に指定されている。オホーツク人の住宅が火事に遭い、木製品が炭化したことで朽ちることなく現在に残されたのである。中でも「熊頭注口木製槽」は独特の



復元された熊頭注口木製槽

形をしている。どのような目的で使われたのかは定かでない。私は勝手に想像して見た。この辺りでとれる山ぶどうで作った葡萄酒をこの器にいれて受け皿に注いでオホーツク人の賑やかな宴会に使ったのではなかろうかと妄想した。

郷土資料館を出た私たちは国後島を一望できる羅臼町展望台へと向かった。

展望台は、羅臼町の市街地から曲がりくねった急な坂道を登り切った場所にあった。ここから国後島を見ると、標津町から見える島の形とは異なり、南北に長い島であることが良く分かる。

展望台には小さなホールがある。私たちはここで脇紀美夫さん（元羅臼町長、前千島列島居住者連盟理事長）の講話を聴くことが出来た。国後島出身の脇さんは長年にわたって北方領土返還運動の先頭に立って尽力してきた。ウクライナ戦争で日ロ間が冷え切ってしまった。とくに日ロ安全操業協定の履行は羅臼町の漁業者にとって死活問題となっている。脇さんは北方領土返還運動を次の世代へ引き継いで行くのが大切だと力説した。

脇さんの講話を聞いた後、私たちは羅臼から宇登呂に通じる知床横断道路へと向かった。朝のうちは凍結のため閉鎖されていたが午前９時に解除された。この道路は冬期間には閉鎖される。この日はシーズン最後となるかもしれない、そんな機会に恵まれた。

北方領土について語る脇紀美夫さん

羅臼の市街地から秘湯「熊の湯」を左手に見て知床峠を目指す。紅葉の山谷が続いている。突然、道路の中央を悠然と歩くヒグマの親子に出遭った。バスは一時停車、車内は騒然となった。間もなくヒグマの親子は進行方向右手の笹薮に消えた。ヒグマ生息密度が高い知床でもめったにない光景である。毎日のように運行しているバスの運転手はヒグマに出遭うのは今年３回目ですと話していた。

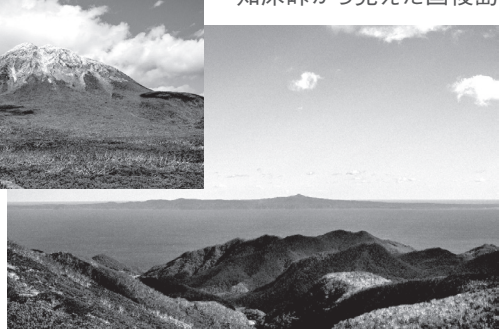
突然現れたヒグマの親子

バスは知床峠に着いた。知床半島の最高峰の羅臼岳（1,661m）山頂付近が薄っすらと雪化粧していた。何とも優美な姿である。私たちはバスを降りて羅臼岳をバックに記念撮影した。外の空気は少しひんやりとしていた。国後島もくっきりと姿を見せていた。

2023 年 10 月 21 日から 22 日の２日間、標津町そして知床を巡るボーダーツーリズムは終わった。私たちは普段の生活で北方領土返還運動は少し遠い存在になっている。しかし、この地に来ると暮らしと密着した身近な問題であることが身に染みて感じた。そして、知床は懐の深い大自然であることを体感した旅でもあった。

付記：本エッセイは特定非営利活動法人国境地域研究センター（JCBS）のホームページより転載したものである。

知床峠から見えた国後島



羅臼岳